

# 「来てください。」

【聖書箇所】ヨハネの黙示録 22 章 17 節

## ベレーシート

●聖霊の導きに従って、聖書的な「キリストの花嫁」についてランダムに(=思いつくままに)取り上げて行きたいと思っています。その最初に取り上げるのは、ヨハネの黙示録の最後の章(22 章)にある「見よ。わたしはすぐに来る。」と語る花婿に対する花嫁のことば「来てください。」です。新約聖書の最後の書であるヨハネの黙示録から取り上げるのは、「**終わりには、永遠の始まりがある**」というすばらしい希望があるからです。私たちはこの希望に満ち溢れていなければなりません。

●礼拝前に流れている CD の曲をお聞きになっていると思いますが、そこに流れている曲は Terry MacAlmon(テリー・マッカルモン)という方が作詞・作曲された“Even so”というタイトルの曲です。とてもすばらしいメロディーです。出だしの歌詞は、Even so come Lord Jesus come と歌われます。これはキリストの花嫁の声です。以前、私はこの曲を訳して歌いたいと思いましたが断念しました。それは英語の Even so という言葉をどうしてもうまく訳せなかったからです。Even so とは、「そうです、そのとおりです、・・・でも、どうか」といったニュアンスなのですが、日本語のことばにして歌えない英語の独特な表現らしいのです。ギリシア語原文のネストレ 27 版にはその Even so に当たることばはなくなっているのですが、それまでの原本ではギリシア語で「ナイ」(vai)という言葉が入っていたのですが、この「ナイ」に当たることばが英語の Even so なのです。このことばがヘブル語になると「ナー」(נָּ)となるのですが、その「ナー」という言葉から、最近になって、Even so とは「どうか」(please)というニュアンスだと理解できたのです。「しかり、わたしはすぐに来る」という花婿の声に対して、花嫁が「はい。そのとおりです。分かっています。でも、どうか、少しでも早くおいでください。いつもあなたをお待ちしていますから」というニュアンスです。花嫁の花婿に向けられたこの待望のことばで新約聖書は終わっているのです(最後の節の祝福のことばを除けばですが・・・)

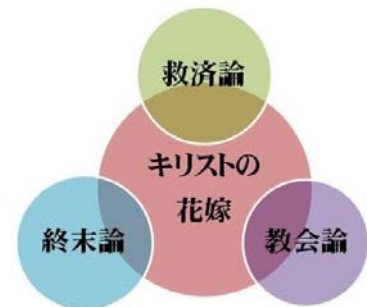
## 1. 花嫁は「ひとり」(単数)

●最初に取り上げなければならない重要な事柄は、花嫁はひとりであるということです。聖書の「キリストの花嫁」は複数の「花嫁たち」ではなく、単数の「花嫁」だということです。「ひとりの花嫁」です。これは重要なことです。「花嫁」とは教会のことですが、一人の花嫁として表わされてされています。世界中の多くのクリスチャンたちは、一人の「花嫁」なのです。まずはこの感覚を私たちの心に深くなじませる必要があります。男性はこの概念になじむのに少々難しさを覚えるかもしれませんが、繰り返し、瞑想を深めていくことで、それが自分にとって重要な表象であることに気づかれていくと思います。

●「キリストの花嫁」はすべてのクリスチャンの集合体です。教会は聖書の中で以下のようにさまざまなイメージで表現されています。「一人の牧者を持つ羊の群れ」、「ぶどうの木の幹につながる枝々」、「ひとつの礎石を持つ建物」、「かしらとからだ(肢体)」、「一人の王とその民」、そして、「一人の花婿とその花嫁」です。

●教会を表象するこれらのなかでも、特に、「キリストの花嫁」という表象は、神学的な用語を使うならば、以下のように三つの領域を含んでいます。

- (1) 救済論とは、キリストの贖罪による義認、聖化、栄化を含む領域。
- (2) 教会論とは、神のご計画において奥義として啓示されたキリストと教会の関係を含んだ領域。
- (3) 終末論とは、神のご計画における完成へのプロセスとその成就について扱われる領域。



●これらの三つの領域を「キリストの花嫁」はカバーしています。ですから、これから「キリストの花嫁」を瞑想していくときに、おのずとこれらの領域と抵触することになるのです。

## 2. 「わたしは・・来る」という花婿の声

●ヨハネの黙示録 22 章は三度、花婿の声が記されています。その内容は、微妙に異なるところもありますが、ほとんど同じです。

- (1) 7 節 「見よ。わたしはすぐに来る。」・・・イエシュアのことばを御使いが代弁している
- (2) 12 節 「見よ。わたしはすぐに来る。」・・・イエシュア自身のことば
- (3) 20 節 「しかり、わたしはすぐに来る。」・・・イエシュア自身のことば

●ここでひとつの突っ込みをしたいと思います。「わたしはすぐに来る」という表現。この表現になにか違和感を持ちませんか。この表現を不思議に感じませんか。感じない方もいると思いますが、私は違和感を持つのです。「わたしは来る」という表現はギリシア語では「エルコマイ」(ἔρχομαι)という語彙です。一人称現在形で使う表現です。未来形ではなく現在形です。今すぐにも行こうとしているところだというニュアンスです。英語も I come と訳しています。今、花婿であるイエシュアはどこにいるのでしょうか。天におられるとすれば、「わたしはすぐに来る」ではなく、「行く」ではないでしょうか。実際、「エルコマイ」(ἔρχομαι)は、来る、行く、いずれにも使われます。ところが多くの聖書はこの部分を「わたしはすぐに行く」とは訳さないで、「来る」と訳しています。ここが私には謎なのです。

●ヨハネの福音書 14 章で、イエシュアは次のように言われました。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 14 章 1～3 節

14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。

あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしは行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

●ここでは「行く」「来る」ということがはっきりしています。イエシュアがまだ地上におられたとき、弟子たちに語ったことばですから、地上の側から語っています。ですから、「行って」また迎えに「来る」わけです。しかし黙示録の場合、御子イエシュアは今、御父の家において弟子たち(花嫁)を迎える準備をしているわけです。御子は御父のゴーサインがあつてはじめて迎えに来ることができます。迎えに来る空中再臨の時期がいつなのか分からないのはそのためです。父の家の側からすれば、私たちを迎えに「来る」ではなく、迎えに「行く」となるのではないのでしょうか。黙示録 22 章の花嫁は天の御父の家において、花嫁は地上にいます。花嫁側からならば、花嫁に迎えに「来てください」となりますが、花婿側からすれば、花嫁を迎えに「行く」となりませんか。「今いくよ、くるよ」という関西の女性漫才師のペアがおられましたが、「行くよ」「来るよ」という日本語の表現は、その動詞を使う主体によって、使い方が異なっています。ところが、不思議なことにギリシア語も、ヘブル語も、「行く」も「来る」も同じことばなのです。

●このようなところに突っ込みを入れても、花婿が花嫁を迎えに来ることは事実なので、すべて「来る」で通しても構わないと言えそれまでです。何よりも、花婿を待つ花嫁に強調点が置かれているということにしたいと思えます。

### 3. 「すぐに」という表現

●次に、「わたしはすぐに来る」というフレーズの中の「すぐに」ということばに目を留めてみたいと思います。「すぐに」と訳されたギリシア語は「タクース」(ταχύς)で、タクシーはここから派生したのではないかと思います。どうでしょうか。「遠からず、遅からず、すぐに」という意味です。あるいは神のご計画では絶妙なタイミングなのだと思いますが、そのように信じない人々にとっては、「盗人」のように来ると言えます。信じている私たちにとっても、実はこの「すぐに」ということばは私たちにとって「惑わし」となることがあります。今だ、花婿は花嫁を迎える準備中なのです。準備ができたなら迎えに来てくださるのですが、人によっては、結構、「準備が長いなー」という感じを持っている人も少なくないと思います。「急いで準備を終えて、早く迎えに来てください。」と思ったとしても無理はありません。なぜなら、どうしても私たちはこの「すぐに」ということばを人間の感覚で受け取ってしまいやすいからです。「すぐに」ということばを正しく理解する必要があります。それは、神の時計で考えてみる必要があるということです。

●「すぐに」とは、「神のご計画における絶妙なタイミングで、しかもそれは、少しも狂いがなく、なされること」と理解するとすれば、私たちはその絶妙な神のタイミングにいつも私たちの時計を合わせていることが必要となりま

す。それはどういう意味でしょうか。

●「終わりの日」や主の再臨の教えについては、今日いろいろな説や考えがあるために、それを語ると人が混乱してしまうのではないかと心配して、そのことについて話さない牧師もいるようです。主の再臨の話をする、現実の問題を解決するのに精一杯なのに、そういうことまで勉強しなければならないのかと思われる信徒もおられるかもしれません。今生きる力を必要としているのに、何か明後日のことを話されても……。そのような人たちは、主の再臨の教えを、あたかも難しい教理、現実の問題とは別のこと、とされているかもしれません。日常的なことに心がいっぱいになっていて、主の再臨の話は日常生活とは別の世界のことだと思われるとすれば、日常生活そのものもゆがんでくるということを知らずにいるのです。

●イエシュアは「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようなからです。」(マタイ 24:37)とされました。人々はノアが箱舟に入るその日まで、「飲んだり、食べたり、めとったり、とついたり」していました。つまり、普通の生活をしていたのです。ここで指摘されているのは、人々が神のご計画と予告のことばに対して全く無関心で、日常生活に浸りきっていたことです。神はノアを通して「義を宣べ伝え」(Ⅱペテロ 2:5)ておられたのですが、人々はそのことに無関心でした。あるいは、主の警告を無視して、そのことを否定していた者もいたと思われます。

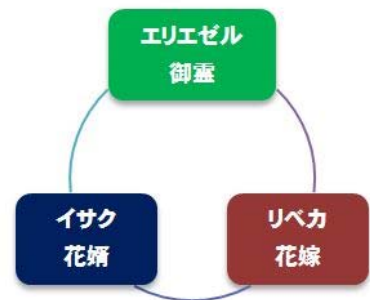
●使徒ペテロは、「一日は千年のようであり、千年は一日のようです」(Ⅱペテロ 3:8)と述べています。これが神の世界の単位です。ですから、「すぐに来る」と神が言われても、人間の時間感覚ではなく、神の感覚で理解しなければなりません。「遅くなっても」という表現も私たちの感覚で理解しようとするならば、ある人々のように、「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。・・・何事も創造の初めからのままではないか。」(Ⅱペテロ 3:4)と言い張るのです。そのような者は、心のまっすぐでない者で、「心高ぶった」者なのです。「終わりの日」に向かって行くこれからの時代は、「健全な教えに耳を貸そうとはせず、自分につごうの良いことを言ってもらう」(Ⅱテモテ 4:3)ことを求めるゆえに、ますます伝道困難な時代になると聖書は述べています。今一度、私たちは神のご計画のマスタープランを知り、今、「**すぐに**」、私たちの時計を神の時計に合わせるべきではないかと思えます。

#### 4. なにゆえに、「御霊」と「花嫁」なのか

●今回の最後のこととして、黙示録 22 章 17 節にある「御霊も花嫁も言う。『来てください。』』というフレーズにある「御霊も花嫁も」ということばに注目したいと思います。花嫁だけでなく、なにゆえに「御霊も」なのでしょう。「御霊と花嫁」の関係とはどういう事なのでしょう。

●アブラハムが自分の息子イサクの花嫁を見つけるために、最年長のしもべであるエリエゼルを遣わした話が創世記 24 章に記されています。息子イサクの嫁探しです。イサクにどのような妻を迎えるかはアブラハムにとって大きな問題であり、生涯の最後の課題ともいうべきものでした。アブラハムは信仰をもってエリエゼルの自分の生まれ故郷(といってもここではハランを意味しています)に遣わして、そこでイサクにふさわしい嫁を探すようにと託しました。

●この課題のためには、アブラハムのしもべ(エリエゼル)とリベカ、そしてリベカの母と兄(ラバン)に対する**神の導きが必要**でした。24章はこれら三者が神からの導きと確信する必要があったことが記されています。この導きは、キリストの花嫁に置き換えるならば、ふさわしいキリストの花嫁は御霊の導きが必要であるということの例証なのです。人間的な判断ではなく、御霊の導きによる花嫁でなければならないのです。この場合、アブラハムとイサク、そしてエリエゼル(=神の助けという意味)は、御父と御子と御霊の関係の型を予表しています。イサクにふさわしい花嫁が与えられたのは、エリエゼルの型とする**御霊の導き**なのです。ですから、キリストの花嫁と御霊は密接な関係にあると言えます。キリストの花嫁を花婿にふさわしく整えるのも、花嫁の傍らにいつも寄りそっておられる御霊なのです。ですから、「**御霊も花嫁も言う。『来てください。』**」となるのです。



●さらにすばらしいことは、17節の後半です。そこにはこう記されています。

【新改訳改訂第3版】黙示録 22章 17節後半

これを聞く者は、「来てください」と言いなさい。

渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

●「これを聞く者」とは、花婿を待ち続けるその美しさに心打たれる者のことです。つまり、まだ救われていない者に対して、同じく「来てください」という者になるように呼びかけているのです。「渇く者は来なさい。」という呼びかけは、かつてイエシュアが仮庵の「祭りの終わりの大いなる日に」、つまり、「八日目に」大声で人々に語ったことばです。「渇き」とは人間が生きるために満たされなければならない最も根源的な欲求です。黙示録では「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。」とありますが、ヨハネの福音書に記されているイエシュアの言葉は、以下のことです。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 7章 38節

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。

●このことばは、最後の最後まで、キリストの花嫁として導かれる者たちへの招きなのです。それは、最後の最後までキリストの花嫁となるチャンスは開かれていることを意味しているのです。とすれば、すでにキリストの花嫁とされている者はますます真剣に花婿に対して、真実に「来てください」と言わなければなりません。なぜなら、その姿には永遠の愛の美しさをあかしする秘めた魅力があるからです。またその先には、永遠の新しいはじまりを予感させる生ける希望があかしされているからではないでしょうか。

2015.6.14